

D O A M 2000年、東京、武蔵嵐山 ・ 国際シンポジウム発題

< 老斤里虐殺 >

盧晶善（延世大、統一委員会副委員長）

クム・チョジャは腹に銃弾が貫通した。一〇歳ぐらいのときだったか。その銃弾は米国製であり、射撃をした者の一人は一八歳の米軍人エドワード・デイリーだった（注1）。彼は機関銃射手として朝鮮半島に派遣されて三日目、浦項（ポハン）に到着したのち最初に受けた命令は避難民を敵とみなせということであった。一八歳が七歳（訳注1）の腹部を貫通する傷を負わせたのだといおうか。

クム・チョジャは一九五〇年、共産軍が永同へ南下してきて、米軍と対峙するようになったとき、二名の米軍人と一名の韓国人警官から村を離れて避難しなければならぬという勧告を受けて、徒歩で村を出て、最初の晩は避難中の数百名の村人といっしょに河原の砂利の上で眠ったか眠らないかのうちに、米軍が射撃をして何人かが死んだ。二家族が死んだのだとも言われ、二人が死んだのだともいわれている。次の日、歩いて老斤里まで来た。永同から東東南にいー二キロメートルばかりになる地点である。米軍は線路の上に上がれと言った。そして身体検査をした。それから、円をつくって座れというと、通信兵が無線で通話をした。偵察機があらわれて、二度、空を回って行ったのち二機のセッセッキ（ジェット砲撃機）が来て、避難民の頭上をねらって砲撃した。数百名が死んだ。逃げて行く人たちには機銃掃射をしながら追い掛けた。

線路の下の洞穴に駆け込んで隠れた。小さな下水溝に入って行った人たちも数十名はいた。洞穴の中には少なくとも二〇〇名以上の避難民、特にこどもと女たち、おばあさんたちなど遠くへ逃げるのが難しい人たちが入っていた。米軍H中隊は洞穴の前と後そして線路の上に機関銃を据えて、集中射撃を加えた。動くものはすべて殺した。死体の底に隠れた人たちが生き残った。

クム・チョジャは腹に貫通する傷を負った。道を横切って逃げようとしたが、動けなかった。内臓が真っ赤に見えていて、両手で内臓を押さえて、「おかあさん、おかあさん、私を連れていって」と叫んだ。銃弾は続けて飛んできて、母親は「お前がついて来られるんなら、来てごらん。わたしは連れて行ってやれない」といいながら、先に逃げてしまった。五〇年たったいまも、それがさびしくてしかたない。どうして母親が私を捨てて逃げることができたのか。

クム・チョジャが道端に倒れてどのくらいたったかわからないが、米軍の衛生兵があらわれた。彼女を車に乗せて病院に運んでくれたが、老斤里の谷間には数えきれないほどの米軍が「ぎっしり並んでいた」という。病院でざっといい加減な手術を受けたのち出て行けといわれて、そこを出て老斤里に向かって歩き始めた。どのくらい歩いたかわからないが、老斤里の近くにくると、死体の腐る臭いが天地を揺るがせるほどだった。数えきれないほどの死体が線路のわきと、二つの洞穴、そして下水溝の中で腐っていた。

村に帰ってきたクム・チョジャには、傷痕が裂けて血が流れ、傷あとにウジ虫が湧いてそれをつまみだすのが仕事だった。抗生物質がないので、薬草を塗って治療するしかなかった。内臓は左に寄ったり、右に寄ったりして、立ち上がると片一方に寄ってしまうので腹帯を巻いて腹をかくし、ちゃんとみせようと苦心するのが、娘時代の日課だった。共同浴場に行くときは、手拭いで腹をかくして風呂に入った。いつでも、のけ者にされて暮らさねばならなかった。結婚して、夫が寢床で腹にさわろうとすると、さわらせまいと振り切って隠れたが、結局ばれてしまった。夫は「だまして嫁いできた」言って殴るのがいつものことだった。結婚後一二年たって、結局、離婚するはめになった。四人のこどもたちを産み育て、今は「孫を見るのが楽しみ」で暮らしているが、あのときの鬱憤と憤りは今も冷えていない。なぜ罪もないたいけな女の子を機関銃で撃ったのか？ なぜ私の一生をめちゃくちゃにってしまったのか？ 私に何の罪があるのか？

筆者は、クム・チョジャおばさん、梁海淑（ヤン・ヘスク）おばさん、鄭求学（チョン・クハク）、鄭クド、鄭殷容（チョン・ウニョン＝老斤里住民被害対策委員長）さんたちとKNCCの金東完（キム・トンゲアン）総務に金浦空港ではじめて会った。クムさんは、若い頃はさぞきれいだったろうと思われる面ざしで、今も活気にあふれ、声もよく透る。そして、黄牛も虎も妨げることのできないほどのおそろしい「叫び」が彼女の心臓には今も生きていた。

私たちは金浦を出発して、シカゴに到着し、そこで飛行機を乗り換えるため一時間ほど待つことになった。飛行場には米国の役人が出てきて私たちを特別に案内してくれ、韓国領事館も職員も出てきたし、韓国の新聞記者たちも取材をした。シカゴ空港ではいらいらするほど長く立って入国手続きを待たなければならないのがいつものことなのに、何度かここを通ったが、こんなにさっと通過することができたのは驚きだった。

オハイオ州クリーブランドに到着して、ルネッサンス・ホテルの一四階に

入った。一四階は一般の客は泊まれない階なので、比較的安全が保障される
ところだった。一日休んで、水曜日正午に米国教会協議会（NCCC - U
S A）五〇周年総会特別礼拝が予定されていた。一二時から一時半までの九
〇分の礼拝は「和解と追悼」の特別礼拝だった。加害者ドナルド・ダウン、
シュナッファー・グレイ、エドワード・デイリーが二人の牧師に付き添われ
て来ていた。機関銃射手として避難民に向かって射撃をしたと告白したエド
ワード・デイリーは長老教会の篤実な信徒であった。

礼拝時間の後で、四時に記者会見が予定されていた。しかし、対策委員会
は礼拝の前に加害者と対談して事件の究明をし、ドナルド・ダウンとシュナ
ッファー・グレイの役割が何であったのかをぜひ尋問させてほしい、これを
清州（チョンジュ）TVが撮影して証拠としたいということであった。真相
究明なしにどのような礼拝をささげるといいのか？ 無条件で和解の礼拝を
ささげるといふのでは話にならないことである、加害者たちがまだ謝罪もし
ておらず、米国政府も謝罪をしていないではないか？

火曜日まる一日、加害者たちと調査の機会を作ろうとしたけれど、米国N
CCCのビクター・シュー牧師はいろいろと理由をあげてだめだと言ひ、こ
れを妨げた。

対策委員会は一二時の礼拝を拒否しようという電撃戦術を駆使した。礼拝
堂にはたくさんのテレビ・カメラが来て、被害者と加害者が入場するところ
を撮影しようとして待機していた。数百名の総会議員たちが入場していた。新会
長となったアンドリュー・ヤング（前アトランタ市長、前米国国連大使、黒
人牧師）が待っていた。清州TVが撮影する中で対談（調査）をするように
しなければ、礼拝を拒否するという立場を強硬に主張しているうち、礼拝時
間が終わるか数分に迫って来た。妥協点を見いだすことは難しかった。た
くさんのマスコミが待っているのに、老斤里被害者たちが入場をしないとい
ば、どうなるのか？ 声もだんだん高くなり始めた。結局、清州TVだけではなく、
あらゆるTVがみな撮影できるよう公開するという原則に合意をし、礼
拝に入場することにも同意した時間はまさに一二時だった。礼拝では鄭殷容
対策委員長が、真相究明、謝罪、補償と賠償が行なわれたのちにこそはじめ
て和解と赦しが起こるだろうという強硬な声明を発表した。加害者を代表し
てシュナッファー・グレイは、戦争ではこのようなことが起こり得るのであ
り、寛容と理解が必要だという発表をした。「謝罪をせよ」という言葉と、
「理解をしてほしい」という言葉とにマスコミはこれを要約した。しかし謝
罪の言葉は出なかった。

クム・チョジャさんに私は、服を脱いで傷痕が残っているところを記者た
ちに見せてやることができれば、西洋の記者たちを説得する助けになるだろ

うが、見せてやらなくてもかまわないと言った。クム・チョジャさんはためらっているようにみえたが、決心したようだった。彼女はカメラの前で服を下ろして、銃弾が貫いて行った腹を見せてやった。夫にも見せなかったところである。そして彼女の目からは涙が流れた。その涙は流れ落ちる涙ではなくて、目から直線になって前へ飛んで行く銃弾のようだった。

そして叫び出すように言った。「なぜ、小さい子に銃を撃ったの？ なぜ、なぜ、私たちを殺そうとしたの？」と。

この場面を取材しそこなった記者たちが駆けつけてきて、もう一度傷痕を見せてほしいと懇願した。彼女はもう一度服をおろして見せてやった。

グスタフ・ニーバーという記者が熱心に取材した。彼はニューヨーク・タイムスの記者だったが、彼の父親は世界的に有名な神学者のニーバーだった。ニューヨーク・タイムスには一面全部の約50%ぐらいの大きさで老斤里の記事が載った。

そこには人民軍もおらず、人民軍のタンクもなかったとクム・チョジャは言っている。米軍の戦闘日誌があるが、その戦闘日誌を見ても、タンクが現われたという記録はみられない。また人民軍がこの虐殺のときまでに老斤里に現われたという記録もない。少なくとも一九九九年九月までに記録されたところではタンクが現われたという記録は老斤里の状況にはなかった。老斤里からかなり遠く離れたところ、一二キロメートル以上離れたところに現われた可能性はたいへん高いであろう。

しかし、老斤里には、人民軍もタンクもいなかったし、数百人の避難民たちは殺される理由がなかった。

クリーブランド新聞の一面には老斤里被害者の顔がカラーで掲載されており、朝と夕方ニュースの時間にテレビで報道が続いた。鄭求学さんは最初の日の機関銃射撃で顔と鼻が飛んで行った。彼は洞穴の中で死体の底にこっそり忍びこんで隠れていた。彼の母親は銃弾に当たって死に、二歳になった弟は、死んだ母親の乳を続けてしゃぶっては泣いた。右の乳をしゃぶっては泣き、左をしゃぶっては泣いた。死んだ母親の乳が出るはずはなく、こどもをなだめることもできなかった。泣き声や何かの物音がすれば、機関銃の弾がねらいを定めて飛んできた。人々は声をたてないようにと必死になり、静かにしろと叱りつけた。二歳の弟がこのことを聞き分けられるはずもなかった。夏の日はだんだん暑くなり、洞穴の中には飲む水もなく、食べる物もなかったが、二〇〇名余りの人々が、ぎっしり積み重なる

ように、互いに身動きもできず死体の後に隠れ、銃に当たった人たちの死体を前の方にバリケードにして積み上げたが、機関銃の弾は死体を貫き、その後の人たちも死んだ。二歳の弟は二日目に銃に当たって死んだ。約五〇メートルから百メートルほどの距離から米軍が射撃したのである。

七歳の鄭求学は死体の中で血の水をすすって飲みながら、一週間の間隠れていた。米軍もいなくなり、人民軍もみな通過して行ったが、彼はそれを知るすべがなく、また数日の間、死体の中で死んだねずみのようにひっそり隠れていて、結局息をついて生きのびたのである。死体の中にだれかが生きていたという噂を聞いて、兄さんが夜こっそり探しに来て死体をひっかきまわして、求学や、求学やと呼んだ。彼は答えたが、声が出なかった。結局、兄が求学を見つけて負ぶって家に向かってしばらく歩いたが、後を振り返って弟の顔を見ると。弟の顔がなかった。彼はびっくりして、道端に放り出して逃げ出したが、もう一度引き返して負ぶってきた。父親が言ったのは、これはすぐに死ぬだろうに、なぜ負ぶってきたのか、裏山に行って捨ててこようということであった。兄は「まだ息をしているのだから、一晩だけでも、おいてみましょう」と言った。結局、彼は生き返ったのである。彼の顔はいいかげんな整形手術で、醜く、幼い小学校の頃からいじめの種にされ、一生の間、一人で暮らした。写真をとることをいつ断ってきた。今でも彼は新しい整形手術を受けたいと願っている（訳注2）。その顔は日刊新聞に大写しになって載った彼の憤怒は今も冷めていない。どうして幼い子どもたちを殺したのか？

新聞はあらそって老斤里の記事をのせ、中国や日本の記者たち、ヨーロッパの記者たちも見えた。李（イ）スンマン牧師、咸（ハム）ソングク牧師、金（キム）インシク牧師、李（イ）ビョンギュ牧師ら韓国人牧師たちが親切に同伴してくれた。

米国の放送局は、シカゴ大学のブルース・カミングス教授との対談を電話で生放送をして、なみなみならぬ熱意を見せてくれた。

私たちは毎晩集まって、次の日の作戦をたてた。ワシントンDCへ行って、国防省を訪問しなければならないし、ナショナル・プレスセンターで記者会見をするようになっていた。問題は国防省でどのようにするかということであった。

ワシントンの空港に到着した私たちは二組に分かれて、一組は六・二五参戦勇士たちの墓地を訪問し、その日が米国の戦没者記念の日だということを利用して、金東完総務と私たちは韓国人放送局で生放送をすることになった。

次の日の朝、米国防省の車がハワード・ジョンソン・ホテルに私たちを迎えに来た。私は車で案内してくれた役人に、パトリック・ヘンリー次官補とクレイガン次官補はどんな人たちなのかを聞いた。彼らはメイン大学の同窓生だといった。メイン大学はカナダとの国境に接した東部の最北端にあった。海の貝類の産地としてよく知られた州である。

ペンタゴン（国防省）の玄関にはこの方々が外の階段に出て待っていた。二人のおばさんの演出がやはり、大きな感動を招いた。義眼をその場ではずし、機関銃で撃たれた腹を見せてくれたからだ。

ペンタゴンはすでに声明書を準備して、私たちに修正、補完を要請し、いつ記者に配布すればよいかと相談した。その声明書には、徹底した速やかな調査をするということが言及されているだけで、謝罪と補償、賠償への言及はなかった。

午後、私たちはワシントンDCの記者会見場、ナショナル・プレス・クラブで、会見場に足を踏み入れる余地すらないほどいっぱいになった記者たちと、TVカメラの中で、会見を行なった。やはり、眼を抜き出し、腹を見せ、鼻を見せてやった。二歳の幼い子が死んだ母親の乳をすすりながら泣いていたが、二日目に銃に撃たれて死んだという話をするとき、わたしは通訳しながら、記者たちの顔を見た。ヴォイス・オブ・アメリカ（VOA）の記者が涙をぼろぼろこぼすのが見えた。他の記者たちも涙を流していた。テレビジョン撮影記者たちも、カメラを忘れて話に聞き入っていた。

米国はまだ謝罪もしておらず、クリントン大統領はあらいざらい徹底して調査せよと指示している。この事件は総合的に取り上げなければならない。人種差別主義による集団虐殺、白人たちを中心とした黄色人種への差別、ブレトン・ウッズ会議（注2）の結果に起因する共産主義者を殺すことを正当だと判断する価値観、経済的利益だけを追求するための自由主義的、資本主義世界の戦争、人間の不安心理、人殺しをする心理、集団的な戦争精神病、生態的要因、遺伝子的要因、新植地的な支配衝動などの一つもゆるがせにできないものである。弱肉強食の世界を変えることのできる戦術と戦略は何であることを明らかにしなければならない。

虐殺の歴史

アドルフ・ヒットラーのユダヤ人虐殺で約六〇〇万名が虐殺されたという。ロシア共産党の人種抹消的な政策で六〇〇万名から一六〇〇万名が虐殺され

たという。ヨーロッパから米国に到着した白人たちが原住民を虐殺し、一六〇〇万名の原住民たちが暮らしていたアメリカ大陸に今は約一四〇万名の原住民が住んでいる。米国政府は公式的な謝罪をしていない。米国メソジスト教会は一九九五年になって、公式謝罪声明を採択した。

ハワイ島の女王の国には、約一〇〇万名の原住民たちが暮らしていたが、米国海軍がやって来て、王国を陥落させ、今は約二～三万の原住民たちが暮らしている。クリントン大統領はこれについて謝罪をしたが、経済的補償はしなかった。

英国からオーストラリアに到着した白人たちが原住民たち約四〇〇万名を虐殺し、今は約四〇万名が残っているが、オーストラリアの現在の首相（白人）は謝罪することを拒否している。

ベトナム戦で三〇〇万以上のアジア人たちが死んだことも実証的に分析されなければならない。

老斤里虐殺は総体的、総合的に、歴史的な視野をもって分析されなければならない。米国が謝罪しない理由はやはり、人種生態的、軍事的、国際政治的支配現象を包括しつつ総合的に分析されなければならない。米国は戦闘をしない民間人を殺してはいけないという非戦闘員原則（NON-combatant immunity）の戦争倫理を無視して、三〇〇名余りの老斤里の人々を虐殺する非倫理的な行動を行い、まだ謝罪もしていない。謝罪し、補償し、再び韓民族を虐殺することのないようにしなければならないのである。老斤里虐殺は黄色人種対する人種虐殺の性格をもっている。人種差別が虐殺に結びついた場合であり、偶然というよりは、数多くの歴史的な事例があったという点を指摘しなければならない。根本的に強大国や武力の強かったヨーロッパと米国の民族はこのような集団的で非倫理的な虐殺を再びしないようにする悔い改めと再生の姿勢を誓わなければならないであろう。

参考文献

鄭殷容 『老斤里対策委員会の立場』 老斤里米軍良民虐殺対策委員会
同 『老斤里米軍良民虐殺事件の概要』 同

ワシントン・ポスト 2000年2月7日 [www.washingtonpost.com/
-srv/national/longterm/nogunnri020600a.htm](http://www.washingtonpost.com/-srv/national/longterm/nogunnri020600a.htm)

韓国日報 老斤里銃撃荷担米兵士証言「部隊長全員射殺命令」1999年10月8日5頁、5版

NBC放送 「老斤里の橋」 1999年12月8日 PM10時

注

- 1 . Edward Daily 2888 Kirkwood Rd.Clarkille,Tenn.37043-5876 に住んでいる。
当時機関銃として250発を射撃し、約30分の間射撃が続いた。Dateline NBC(10:00 PM ET)、 NBC Nightly News(6:30 PM ET) National Broadcasting CO.Inc.NBC News Transcripts. Deadline : The Bridge at No Gun Ri:GI involved in Korean War Massacre Reunites with survivors.
- 2 . Brattonwood Conference(1944)で communismを封じ込めることで除去するため世界金融機構をはじめめることを決定し、その後、International Monetary FunndやWorld Bankが設立された。

訳注

- 1 . すぐ上の行には一〇歳くらいとあるが、当時一〇歳とすれば、九九年には五九歳、七歳とすれば五六歳になるので、筆者にはすぐわかったはずなのですが？
- 2 . 近刊の呉連鎬著『朝鮮の虐殺』によれば、兄の世話で幸いにも結婚して子どもにも恵まれた。奥さんは彼の苦しみを長年見続けて、再手術をすすめたが、その都度、鄭さんは今になってはその気もないと断っているという。